# Mechthildのドイツ語と宮廷詩人語

須澤　通

1．　ドイツ語史において超地域的な言語の確立を目指した最初の試みとしてのシュタウフェン朝宮廷詩人語（höfische Dichtersprache）について，従来の研究はこの言語を特定社会層における文学的コミュニケーション手段のための機能語（Funktiolekt）[1]，あるいは地域的均一化の傾向ばかりでなく，高められた言語（gehobene Sprache）という意味でのHochsprachеへの道にあったとする[2]など，条件付きながらもここに一定の超地域的文章語もしくは文学的共通語への傾向を認めている。しかし，シュタウフェン朝文化の崩壊，それにともなう騎士文化の衰退とともに，この共通語への傾向の芽もしぼみ，結局この宮廷詩人語がその後の新高ドイツ語文章語の成立過程に連続することはなかったとするのが今日の一般的な見解である[3]。

宮廷詩人語の特徴は，何より，借用語使用，宮廷的・倫理的価値に関するWortfeld（語場），洗練された修辞学的表現様式とくにStil（文体）など，ドイツ語の言語内容の洗練と精神化にあった[4]。そしてこの道は中世後期の神秘主義文学において，もう一度重要な進展を遂げることになるが，それは新高ドイツ語に対して，騎士階級のドイツ語が残した影響より，より大きな影響を与えることになる[5]。

ドイツ中世後期のMystiker（神秘主義者）たちは，その多くが貴族階級出身ということから，ドイツ語と瞑想的に取り組むために必要な一定の条件を，ドイツ中世盛期の宮廷詩人の言語芸術や精神的語彙から得ていた[6]。これまでラテン語が担っていた領域で起こったドイツ語の言語内容の洗練と精神化という運動は，宮廷詩人の言語社会学的な開放と同様に，反教会的な性格を帯びたものであった[7]。

シュタウフェン朝宮廷詩人とドイツ中世後期のMystikerは共通の精神的基盤に立っていた。この両者を結び付けるものとして，Charakterfestigkeit（志操堅固），Selbstdisziplin（自己規律），さらに人間の道徳的責務に対する厳格な考え方，日常性を凌駕した精神性があげられる[8]。ここから具体的に現れる形は確かに両者それぞれ異なる。つまり，宮廷詩人たちが「現世」に彼らの理想郷を求めたのに対して，Mystikerたちの目指すところは「現世的なもの」の超越にあった。しかし，その基盤をなす両者の共通の精神的中心概念は，「自我」，すなわち“eigenes Ich”を強く知覚するところにある[9]。宮廷詩人，特にMinnesängerにとって「愛（Minne）」は全く個人的体験であり，同様にMystikerにとって「神との一体化」は全く独自の個人的体験である。両者はそれぞれ自らを観察し，自身の心の動きを分析する。「自我」の発見なしには宮廷文学は存在しえなかった。同様に「自我」の発見を伴うことのないMystkierについても考えることは不可能である。この全く新しい体験的自我が，それぞれ現世と現世を超越したところの違いがあるにせよ，いずれも個人的に向かい合う相手，「汝」すなわち“das Du”を求めるのも両者共通である[10]。

Mechthild（1207？～1282？）がdeutsche Mystik（神秘主義）を開花させ始めた時，宮廷文学の盛期を担った詩人たちはすでに舞台から去っていた。この時期，この地には，宮廷

詩人の hôher muot「高潔な心」が根付く土壌はもはや存在しなかった。宮廷詩人たちのことばは，Mechthild が言うように，「この台所（地上）では理解しえない宮廷ことば（die hovesprache, die man in dirre kuchin nut vernimet)」[11] となってしまった。しかしその一方で，宮廷詩人と deutscher Mystiker には，すでに述べた「精神的姿勢（Geisteshaltung)」における共通点が見られ，さらに言語使用に関しても両者の，特に Mechthild と宮廷詩人の類似性がうかがえる。

以下に，宮廷詩人語の新高ドイツ語文章語生成に至る語史的連続性の観点から，中世後期の deutsche Mystikerin, Mechthild von Magdeburg のドイツ語と中世盛期の宮廷詩人のドイツ語を比較して，両者の共通性および前者の後者からの影響について考察する。

2． Mechthild の "Das fließende Licht der Gottheit"[12] は，散文と韻・リズムの詩形式の間を絶えず行き来する。自身の「神体験（Gotteserlebnis)」を伝え，刺激的な宗教的経験を立証するために，彼女には好ましからざる要因を含むことのない（nicht vorbelastet)[13] 新しい表現手段が必要であった。Mechthild の文には，中世盛期の宮廷と，その文学で見られた観念および表現様式が再度登場する。ここでは，神と魂の係わりの中で，「神はこの台所（地上）では理解しえない宮廷ことばで魂に挨拶し，宮廷で着るように衣装を魂に着せる(So grusset er si mit der hovesprache, die man in dirre kuchin nut vernimet, und kleidet su mit den kleidern, die man ze dem palaste tragen sol)。」(Mechthild Ⅰ, 2, 9 ff.)

彼女の書で minne は再び宮廷文学における輝きを取り戻し，liebe とともに「真心からの愛」を意味する[14]。

Mit unser zweiger minne solt du gehohet werden. (Mechthild Ⅰ, 36, 5)

「私たち二人の愛によりそなたは高められよ」

Ich wil mit mime liebe wesen, …… Ich bin sin vrode, er ist min qwale.

(Mechthild Ⅰ, 5, 13 f.)

「私は愛する人と一緒にいたい。……。私はその人の喜び，その人は私の苦しみである」

ここでも，宮廷文学と同様，抽象名詞の擬人化が多く見られる。

vro minne (Mechthild Ⅰ, 1, 5)(ミンネ婦人), vro truwe (Mechthild Ⅳ, 12, 50)(貞節婦人), vro stetekeit (Mechthild Ⅳ, 12, 57)(不変婦人), vro pine (Mechthild Ⅳ, 12, 85)(苦痛婦人)

Mechthild のこの作品は，その三分の一が対話（Dialog）からなる。この形式は旧約聖書の Hohelied（雅歌）と類似するところも多いが，現実における同一の時間と空間で起こった男女の会話を，ドラマのように写し出した，宮廷詩人 Minnesänger の Dialoglied と共通する。以下に，Mechthild と Albrecht von Johansdorf[15] の詩を比較する。

"Got grusse uch, vro minne."
"Got lone uch, vro kuneginne."
"Vro minne, ir sind sere vollekomen."

"Vro kuneginne, des bin ich allen dingen oben."
……
"Fro minne, nu sint ir har zu mir komen und ir hant mir alles benomen, das ich in ertrich ie gewan."
"Frowe kunegin, ir hant einen seligen wehsel getan."
"Frowe minne, ir hant mir benomen mine kintheit."
"Frowe kuneginne, da wider han ich uch gegeben himelsche vriheit."
(Mechthild Ⅰ, 1, 2 ff)

「ミンネ様，こんにちは。お恵みがありますように。」
「王妃よ，そなたにも恵みがありますように。」
「ミンネ様，あなたは全く完全なお方です。」
「王妃よ，私はすべてのものを支配しています。」
……
「ミンネ様，あなたは私のもとに来られ，私がこの地上で得たすべてのものを私から奪い取られました。」
「王妃よ，そなたは幸せな交換をしたのです。」
「ミンネ様，あなたは私から私の幼い時代まで奪い取られました。」
「王妃よ，その代わり私はそなたに天国の自由を与えました」

"waz welt ir sô eine her getân ?"
"Vrowe, ez ist alsô geschehen."
"sagent, war umbe sint ir her ? Des sult ir mir verjehen."
"Mînen senden kumber klage ich, liebe vrowe mîn."
"wê, waz sagent ir tumber ?……"
"Vrowe, ich enmac ir niht enbern."
"Sô wil ich in tûsent jâren niemer iuch gewern."
"Neinâ, küniginne! daz mîn dienest sô iht sî verlorn !"
"ir sint âne sinne, daz ir bringent mich in selhen zorn."
"Vrowe, iuwer haz tuot mir den tôt." (Albrecht von Jahansdorf MF 93, 12)

「お一人でお出でで何のご用？」
「奥様，何となく。」
「さあ言うのです，何故こちらに来られたのですか？私に答えるのです。」
「私の焦がれる苦しみをお話します，奥様。」
「まあ，お馬鹿さん，何を言うのですか？……」
「奥様，それを申し上げずにはおられません。」
「でも私は千年たってもそなたに許しません。」
「いいえ女王様，私の奉仕をこのまま無駄にされませんように！」
「私をこのように怒らせるなんて，そなたも考えのない人ね。」
「奥様，あなたがお怒りになれば，私は死んでしまいます。」

Mechthildの書には，この他にも，宮廷詩人と共通する表現様式が数多く見られる。Mechthildの文表現の特徴である，「愛（愛する人）が奪い取る，苦しめる」のようないわゆる“Minneklage”（ミンネの嘆き）は，宮廷詩人の抒情詩に多く見られる表現形式である。

ir hant mir alles benomen, das ich in ertrich ie gewan. (Mechthild I, 1, 8 f.)

「あなたは私がこの地上で得たすべてのものを私から奪い取られました。」

Frowe minne, ir hant mich also sere betwungen, das min licham ist komen in sunderlich krankheit. (Mechthild I, 1, 17 f.)

「ミンネ様，あなたは私の体が特異な病に倒れるほどひどく私を苦しめました。」

Minnesangでも

Werlt, ich hân dînen lôn ersehen: swaz dû mir gîst, daz nimst dû mir.

(Walther von der Vogelweide L. 67, 8 f.)[16]

「浮世よ，私はそなたのお返しとやらを見せてもらった，そなたは私に与えたものをことごとく奪い取るのだ。」

Süeze Minne, sît nâch dîner süezen lêre mich ein wîp alsô betwungen hât,

(Walther von der Vogelweide L. 109, 22 f.)

「愛しきミンネよ，そなたの甘美なる教えに従って，あるご婦人が私をひどく苦しめたのだから」

ich klage iu allen über mîner hêren frouwen lîp. diu hât mich sô beroubet fröiden her in mînen tagen, (Ulrich von Liechtenstein KLD, 58, Lied 20)[17]

「私はあなた方すべてに私のやんごとなきご婦人のことを訴えます，この方は私の日々の生活の中で私からこれほどまでに喜びを奪い取られたのです。」

Mechthildの書には聖書のAllegorie（アレゴリー），新プラトン的な隠喩が用いられている。

Si wirt an dem crutze so vaste genegelt mit dem hammer der starken minneloffe,

(Mechthild III, 10, 28 f.)

「それ（魂）は強烈な愛の飛翔のハンマーで十字架にしっかりと釘づけられる」

Die unedel sele, ……, owe leider, der ist dis leben alles nacht!

(Mechthild III, 24, 31 ff.)

「汚れた魂よ，ああ，悲しいかな，この魂にはこの人生はすべてが闇夜である。」

Paradox（パラドックス）もまた彼女の表現法の特徴である。vro pine（苦痛婦人）が神に向かって嘆く次の言葉に，MechthildのParadoxの典型的例を見ることができる。

Herre, ich machen manigen selig und bin doch selber nit selig, und ich verzer manigen heiligen lichamen und bin doch selber bose, und ich bringe manigen zu dem himmelriche und kum doch selber neimer dar. (Mechthild IV, 12, 95 ff.)

「主よ，私はたくさんの人を幸せにしますが，私自身幸せではありません。私はたくさんの聖なる体を食べていますが，私自身悪人です。私はたくさんの人を天国に連れて行

きますが，私自身決してそこへは行けません。」

このような表現形式は，宮廷詩人の詩的手法と類似するところも多いが，彼女のAntitheseと，特にOxymoron使用に，宮廷詩人の強い影響を見ることができる。

Antitheseは相反する，あるいは対照的な概念を同一構文を用いて対立させる文体である[18]が，Mechthildでは主として神と人間の対比の表現手段としてこの文体が用いられている。

und des blumen fruht ist ein untotlich got und ein totlich mensche und ein lebende trost des ewigen libes, (Mechthild Ⅰ, 22, 5 f.)

「その花の果実は死することのない神，死すべき定めの人間，そして永遠の命の生ける慰めである」

In der grosten sterki kumt si von ir selber, (Mechthild Ⅰ, 22, 9)

「彼（花婿）の大きな力の中で彼女（花嫁）は力を失った」

AntitheseはHartmann von Aueによって整えられ，修辞学的表現法として確立した[19]。

des tôten ist vergezzen: der lebende hât besezzen beidiu sîn êre und sîn lant. (Iwein 2435 ff.)[20]

「死者は忘れられ，生き残ったものが死者の名誉と領土を手に入れた。」

trôst seite im minne, zwîvel haz. (Tristan 885)[21]

「希望は彼に愛と言い，絶望は憎しみと言った。」

これに対して，Oxymoronは意味上相いれない対立する語や概念どうしを組み合わせ，相補的に一つの観念にまとめ，含蓄のある効果的な表現を生み出す手法で，Antitheseから発展し，これをさらに高度化したものである[22]。MechthildでもⅠ，22を中心に特徴的なOxymoronが見られる。彼女のOxymoronは，その多くが神に関するParadoxを表現するためのものではあるが，その内容と表現法において中世盛期の宮廷詩人の影響がうかがえる。

in dem schonsten liehte ist si blint an ir selber und in der groston blintheit siht si allerklarost. In der grosten klarheit ist si beide tot und lebende. Ie si langer tot ist, ie si vrolicher lebt. (Mechthild Ⅰ, 22, 9 ff.)

「この上なく美しい輝きの中で彼女自身見えなくなってしまったが，全く見えない中で彼女にははっきりとものが見えた。このはっきりと見える状態において彼女は死してなお生きているのである。彼女の死が長ければ長いほど彼女の生は幸せになる。」

Ie si richer wirt, ie si armer ist. (Mechthild Ⅰ, 22, 16)

「彼女が豊かになればなるほど彼女は貧しくなる。」

Ie si stiller swiget, ie si luter ruffet. (Mechthild Ⅰ, 22, 24)

「彼女が静かに沈黙すればするほど彼女はますます大声で叫ぶ。」

Ie si sich noter scheident, ie er ir mer gibet. Ie si me verzert, ie si me hat. (Mechthild Ⅰ, 22, 29 f.)

「彼らが別れでつらい気持ちになればなるほど彼は彼女にそれだけ多くを与える。彼女は消費すればするほどそれだけ多く所有する。」

Vrowe dich, min sele, wan din leben ist gestorben von minnen dur dich, und minne in so sere, das du mogest sterben dur in, (Mechthild Ⅰ, 28, 4 f.)

「喜びなさい，私の魂よ，なぜならおまえの生はおまえへのミンネゆえに死んだのです，おまえが彼のために死ぬことができるほどに激しく愛しなさい。」

Minne, dinu stetu andaht hat mich in also sussen kumber braht. (Mechthild Ⅴ, 30, 16 f.)

「ミンネよ，そなたの変わることのない深い気持ちが私にこれほどまでの心地よい苦しみをもたらしたのです。」

din wille geschehe und nit der min, wan ich min selbes nit enbin, mer in allen dingen din. (Mechthild Ⅶ, 63, 11 f.)

「私の気持ちではなく，あなたのお心のままに，なぜなら私は私自身のものではなく，すべてにおいてむしろあなたのものだからです。」

ドイツ語における詩的表現の手段としての Oxymoron は12世紀後半の発明であり，それ以前の Frühmhd.までは，主として三位一体，神人としてのキリスト，マリアの処女出産など神学的な Paradox を表現するものに限られていた[23]。これが Hartmann von Aue など中世盛期の宮廷詩人たちにより，文体上のあやとして洗練化される[24]。特に Gottfried von Straßburg において Oxymoron は対立する概念を単一の観念へと止揚する高度な芸術的文体にまで発展する[25]。Mechthild の Oxymoron についても，特に Ⅰ, 22, 9 ff のような，Oxymoron を連続させた Oxymoronkette には Gottfried を連想させるところがある。

der liehte tac wart ir ein naht. (Iwein 1326)

「明るい昼は彼女にとっては夜となった。」

unz daz der Wâleis übersach sîn süeze sûrez ungemach, (Parz. 295, 3 f.)[26]

「ヴァーレイスの勇士には甘く苦い苦悩が目に入らなかった。」

ir tôt muoz iemer mêre uns lebenden leben und niuwe wesen. (Tristan 228 ff.)

「彼の死はこれからもなお私たち生ける者のために生き続け，新しさを失わないだろう。」

der süeze herzesmerze, der vil manic edele herze quelt mit süezem smerzen, der liget in mînem herzen. (Tristan 1073 ff.)

「多くの気高い心を甘美な苦痛で苦しめる心地よい心の痛みが私の胸にある。」

sus was er sî und sî was er. er was ir und sî was sîn. (Tristan 1358 ff.)

「こうして彼は彼女であり彼女は彼であった。彼は彼女のものであり彼女は彼のものであった。」

diu junge künigîn Îsôt daz sî ir leben unde ir tôt, ir wunne unde ir ungemach ze allerêrste gesach. (Tristan 9371 ff.)

「若き王女イゾルデ，彼女が彼女の生と死，彼女の歓喜と悲嘆を一番先に見つけた。」

3． Mechthildは彼女の神秘的体験，宗教的経験を正しく伝え，神とのやり取りを的確に表現するために，これにふさわしい表現様式に加えて，新しい概念を表す語彙を必要とした。彼女の文にはMystik独特の新しい抽象語彙が数多く見られ，その中にはラテン語からの借用造語（Lehnprägung），特に翻訳借用語（Lehnübersetzung）も少なくない。彼女の語彙使用の特徴は，特定の接頭辞（Präfix）及び接尾辞（Suffix）を伴った派生語の豊かさである。Mechthildに始まる中世後期のMystikerたちは神秘主義的エクスタシーともいうべき極限にまで達した激しい宗教的情熱を正確に表現するため，特に，ent-, über-, ver-, vol-をPräfixとして利用し，抽象概念を含んだ多くの語彙を使用したが，Mechthildの用いた，これらのPräfixを伴った語彙は，しかしながら，宮廷詩人に見られたものを大きく超えることはなかった。

entgan（逃げる），entwenen（乳離れする），entzunden（点火する），uberkomen（凌駕する），ubersigen（打ち勝つ），uberwinden（克服する），uberflussekeit（過剰），ubergros（恐れ多い），verdruken（排除する），vereinen（一つになる），versinken（沈む），verzihung（放棄），vollebringen（完成する），vollewahsen（完全に成長する），vollekomenheit（完全性）

Mechthildのnegative Theologie[27]の思想を明示する特徴的なPräfixは，否定，反対を意味するun-であり，これを伴った語彙は膨大な数にのぼる。これらの語彙には，Lehnübersetzungとして，例えばラテン語のincomprehensibilis, ineffabilis, invisibilisを，それぞれunbegrifelich（捉えることができない），unsprechelich（口では言い表せない），unsehelich（目に見えない）と翻訳したもののほか，valsch（悪い），tadeln（非難する），schanden（冒瀆する），krank（病の），schade（有害な），bose（悪の），flegelhaft（無作法な）のような否定概念を持った語彙に対応するものとして，その対極的語彙の否定形のかたちをとり，untriuwe, unloben, unsalden, ungesund, unnutz, unguot, unhubschと新たに創造された語彙などが含まれる。彼女には，これと並んでその後のMystikerたちが好んで使用した，否定を意味するSuffixの-losと結び付いた形容詞が見られる。grundelos（底知れぬほど深い），endelos（果てることのない）。しかし，宮廷詩人において，すでにun-は生産的なPräfixとして否定的形容詞を中心に数多くの語彙を創造している。Suffixの-losについても，例えばHartmann von Aueでも，sigelôs（敗者の），triuwelôs（不誠実な），wiselôs（途方にくれた）のような形容詞の用例を見ることができる。

Mechthildの語彙の最も大きな特徴は，Suffix -heit/-keit, -unge, -nisseを付した新造語に見られる[28]。これらのSuffixを伴った語彙について，Mechthildと中世盛期の宮廷詩人Hartmann von Aue（1160？—1210？）の“Iwein”のそれぞれ最初の1000行における用例を対象に，語彙数と使用された回数（頻数）を比較すると以下のような結果になる。

| | -heit/-keit | -unge | -nisse |
|---|---|---|---|
| Hartmanns Iwein | (語数)10(頻数)19 | (語数) 2 (頻数) 3 | (語数) 0 (頻数) 0 |
| Mechthild v. Magdeburg | (語数)69(頻数)163 | (語数)34(頻数)68 | (語数) 6 (頻数)19 |

-heit/-keit[29]：形容詞，名詞などに付して性質，状態を示す抽象名詞や集合名詞をつくるSuffixの-heit/-keitを伴った派生語はすでに800年頃のAhd.（古高ドイツ語）で見られるものの，Mhd.（中高ドイツ語）の宮廷詩人たちによって重要な造語手段として用いられ，語彙数を増やす。特に過去分詞，現在分詞を含む形容詞からの派生語は，Ahd.の他の造語手段を吸収して増加した。“Iwein”では，それまでのkerge（Kargheit）に代わってkarcheitが，krenke（Krankheit）に代わってkrancheitが，sweche（Schwäche）に代わってswacheitが用いられている。“Iwein”全体では-heit/-keitを付した語彙は31語を数える。形容詞のSuffix，-ecと-heitが結び付いて-keitとなるが，その後Suffixの-ecを付さない形容詞との派生語も-keitをとるようになる。

Kuschekeit（Keuschheit 貞潔），genuogekeit（Zufriedenheit 満足），unahtbarkeit（Unachtsamkeit 不注意），minnesamkeit（Liebe, Zuneigung 愛，好意）

-unge：動詞の語幹に付して行為，行為の結果を示す動詞的抽象名詞をつくる。Suffixの-ungeを伴った派生語は，中世盛期の宮廷文学でもまだ多くは見られない。“Iwein”では，handelunge（Behandlung もてなし），manunge（Mahnung 警告），samenunge（Sammlung ここでは家臣たちの集団），wandelung（Verwandelung 変化）の4語彙のみである。このSuffixを伴った語彙は中世後期のMechthildにおいてようやくその数を増すことになる。

Beschowunge（Anschauung 観想），gebruchunge（Gebrauch 享受），einunge（Einheit 一体化），bekorunge（Prüfung 試練），begerunge（Begehren 願望）

-nisse(-nüsse)：動詞，形容詞などに付して行為，状態を示す名詞をつくるSuffixの-nisse(-nüsse)を伴った派生語は，中世盛期の上部ドイツ語の宮廷詩人ではほとんど見られない。“Iwein”でもvancnüsse（Gefangenschaft 監禁状態）の1例が見られるのみである。中世後期の東中部ドイツ語圏におけるMystikerの手で-nisse(-nüsse)は生産的なSuffixとして多くの派生語を生み出すことになる。

bekantnisse（Kenntnis 知恵），behaltnisse（Erhaltung 不変，維持），hindernisse（Hindernis 障害），luhtnisse（Glanz 輝き），schopfnisse（Geschöpf 神の創造物）

以上で見たようにMechthildは，中世盛期の宮廷詩人によって彼らの特徴的な造語手段として確立された，あるいはその過程にあった特定のSuffixを造語手段としてさらに発展させ，これを利用した多くの新しい語彙を使用している。彼女のこのような語彙使用については，従来の研究によって，deutsche Scholastik（ドイツスコラ学派）の翻訳文学におけるLehnprägungの影響を強く受けたものとされている。これは，ベギン修道会修道女（Begine）のMechthildがラテン語の知識はもちろんドイツ語に関する知識も十分でなく，彼女はこれらの知識を教養豊かな聖職者であるScholastikerの手を借りて修得したものとの推測に基づいている。さらにこれは彼女のことば，Nu gebristet mir tusches, des latines kan ich nit.(II, 3, 48)「私のドイツ語は尽きてしまったし，ラテン語もできない。」を大きな根拠としている[30]。

deutscher Scholastikerさらにdeutscher Mystikerはラテン語からドイツ語に翻訳する

際，ラテン語の特定のSuffixをこれに対応するドイツ語のSuffixにあてはめた[31]。その相関関係（Korrelation）は，例えば最も多く用いられたSuffixの-heit/keitと-ungeについては，lat. -tas → mhd. -heit/-keit: lat. aeternitas → ewekeit(Mechthild II, 3, 11)(Ewigkeit 永遠)；lat. humilitas → diemutekeit(Mechthild I, 44, 28)(Demut 謙虚さ)。lat. -(t) io → mhd. -unge: lat. visio → anschowunge(Mechthild I, 14, 2)（Anschauung 観想）となる。deutscher Scholastikerと deutscher MystikerのLehnprägung，特にLehnübersetzungによる新たな派生語の増産については，Mechthildの後に登場するdominikanischer Mystiker（ドミニコ修道会の神秘主義者）のMeister Eckhart（1260？～1327？），Johannes Tauler（1300～1361），Heinrich Seuse（1295～1366）らのMagisterたちにその例を見ることができる。

4． Mechthildの韻・リズムの詩形式，表現様式に関してNorbert Richard Wolfは，これをRätselなどの大衆文学の影響とする一方，彼女のことばには，新プラトン学派や旧約聖書のHohelied（雅歌）の影響とともに，宮廷文学の表象の世界（Bildwelt）についての知識をうかがわせるものがあることも認めている[32]。Hans EggersはMechthildに例外は認めながら，Mystikerと宮廷文学における言語の類似性を強調することに警鐘を鳴らす[33]。

MechthildはMagdeburgの高貴な騎士の家系出身であるとされる[34]。「私のドイツ語は尽きてしまったし，ラテン語もできない。」（II, 3, 48）の告白にもかかわらず，1207年頃～1282年頃を生きたMechthildは，すでに述べたように，ドイツ語と瞑想的に取り組むために必要な一定の条件を，ドイツ中世盛期の宮廷詩人の言語芸術や精神的語彙から得ることのできる環境にはあった。

これまで見てきたように，彼女の詩形式，表現様式はその内容と表現において，宮廷文学と多くの点で共通性を持っている。抽象概念を示す新しい語彙使用に関しても，彼女においては宮廷詩人の造語法に則った，あるいはこれを発展させたものである。彼女の語彙使用と同時代のdeutscher Scholastikerあるいはdeutscher Mystikerの新造語との関係については議論の多いところではあるが[35]，宮廷文学を土壌とした彼女自身の創作の可能性も否定できない。

Mechthildは宮廷文学と共通の精神基盤に立っていた。Norbert Richard Wolfは彼女のことばに宮廷文学の表象の世界（Bildwelt）に関する知識を認めたが，むしろ彼女は，DiesseitsとJenseitsの違いはあっても，宮廷詩人と精神的内容を共有していたと言えよう。

MechthildのMystikはMeister Eckhartの思弁的書下ろしと異なり，自身の実存的経験から語られたもので，かつてない表現力（Ausdruckskraft）を獲得した彼女の書はDominikanerたちにも読まれ，また彼らによってラテン語及び上部ドイツ語などに翻訳されるなど，多くの人の心を捉えた[36]。Mechthildのドイツ語はその後のMeister Eckhartを中心とするdominikanischer Mystikerのドイツ語にも影響を与え，さらにその言語はMartin Luther（1483～1546）を通して今日のドイツ語にまで影響を及ぼしている[37]。

中世盛期の宮廷詩人語はその最も深いところにおいて，Mechthildとその後に続いたdominikanischer Mystikerのドイツ語に引き継がれ，それは今日のドイツ語にまで連続していると言うことができよう。

# 註

1) Moser/Wellmann/Wolf: Geschichte der deutschen Sprache, Bd. 1. Althochdeutsch-Mittelhochdeutsch. Von Norbert Richard Wolf, Heidelberg 1981, S. 179 ff.
2) Peter von Polenz: Geschichte der deutschen Sprache, 9. Aufl. Berlin-New York 1978. S. 57 f.
3) Stefan Sonderegger: Grundzüge deutscher Sprachgeschichte. Diachronie des Sprachsystems. Bd. 1. Einführung-Genealogie-Konstanten. Berlin/New York 1979, S. 323 f.; Peter von Polenz: Deutsche Sprachgeschichte vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart. Bd. 1. Einführung-Grundbegriff. Deutsch in der frühbürgerlichen Zeit. Berlin/New York 1991, S. 91 f.
4) 須澤　通：「Mhd.のいわゆる宮廷詩人語の超地域語的性格について」日本独文学会研究叢書010，2002年，18頁。
5) Peter von Polenz(1978) S. 59.
6) Ebd.
7) Ebd.
8) Hans Eggers: Deutsche Sprachgeschichte. Bd. 1. Das Althochdeutsche und das Mittelhochdeutsche. Hamburg 1986, S. 464.
9) Ebd., S. 465.
10) Ebd.
11) Mechthild von Magdeburg: Das fließende Licht der Gottheit Ⅰ, 2, 10.
12) Hans Neumann: Mechthild von Magdeburg »Das fließende Licht der Gottheit« Bd. Ⅰ.: Text. München 1990.
13) Fritz Tschirch: Geschichte der deutschen Sprache, 2. Teil, 2. Aufl., Berlin 1975. S. 81.
14) 須澤　通：「ドイツ中世宮廷文学におけるいわゆる集団特殊語彙について」信州大学人文学部，人文科学論集〈文化コミュニケーション学科編〉第33号，1999年，92頁を参照。
15) Hugo Moser u. Helmut Tervooren: Des Minnesangs Frühling. Ⅰ. Text. Stuttgart 1988, XIV, 12.(MF. 93, 12)
16) Die Gedichte Walters von der Vogelweide. Hrsg. von K. Lachmann. 13., aufgrund der 10. von Carl von Kraus bearb. Ausg. neu hrsg. v. Hugo Kuhn. Berlin 1965.
17) Deutsche Liederdichter des 13. Jahrhunderts. Hrsg. von Carl von Kraus. Bd. 1. Text. Ⅱ. Aufl., durchges. v. Gisela Kornrumpf. 1978.(KLD)
18) 須澤　通：「"poeta doctus" Gottfried の文体の特徴－Hartmann との比較において－」信州大学人文学部，人文科学論集＜文化コミュニケーション学科編＞第35号　2001年，2頁。
19) Ebd., S. 3.
20) Hartmann von Aue: Iwein, hrsg. v. G. F. Benecke u. K. Lachmann, 7. Aufl. neu bearb. v. L. Wolff, Berlin 1968.
21) Gottfried von Straßburg: Tristan, nach dem Text v. Friedrich Ranke, neu hrsg. ins Nhd. übers. mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort v. Rüdiger Krohn, 3. durchges. Aufl. Stuttgart 1984.
22) 須澤　通（2001年）7頁。
23) Wiebke Freytag: Das Oxymoron bei Wolfram, Gottfried und anderen Dichtern des

Mittelalters, München 1972, S. 135.

24) Ebd., S. 141.

25) 須澤　通（2001年）9頁。

26) Wolfram von Eschenbach: Parzival, nach der Ausgabe v. K. Lachmann, Übersetzung u. Nachwort v. Wolfgang Spiewok, Stuttgart 1997.

27) Fritz Tschirch: a. a. O., S. 83.

28) Ebd., S. 84 ff.

29) Rudolf E. Keller: Die Deutsche Sprache u. ihre historische Entwicklung. Bearb. u. übert. aus dem Englischen, mit einem Begleitwort sowie einem Glossar vers. v. Karl-Heinz Mulagk. Hamburg 1986. S. 284 ff.

30) Hans Eggers: a. a. O., S. 462.

31) Moser/Wellmann/Wolf: a. a. O., S. 188 f.; Christopher J. Wells: Deutsche. Eine Sprachgeschichte bis 1945, Tübingen 1990, S. 142.

32) Ebd., S. 186.

33) Hans Eggers: a. a. O., S. 464.

34) Die deutsche Literatur des Mittelalters Verfasserlexikon, Bd. 6, 1987 Berlin/New York S. 260

35) Hans Eggers: a. a. O., S. 462.

36) Die deutsche Literatur des Mittelalters Verfasserlexikon: a. a. O., S. 262 ff.

37) Peter von Polenz(1991)S. 245.